

毎年恒例! 秋のイベント

ライブなど
ステージイベント
盛りだくさん!

大人気!
野菜販売

大学で育てている
ひつじと
ふれあえます

10/24(土) EVENT SCHEDULE

- 10:00 オープニング
- 10:30 サークル対抗クイズ
- 12:00 吹奏楽部による演奏
- 12:30 軽音楽部ライブ
- 13:30 現代舞踊ダンス発表
- 14:30 ○×ゲーム
- 15:00 カラオケバトル
- 16:00 ピピリオバトル
- 16:30 軽音楽部ライブ

第11回 10/24(土)・25(日)

郷緑祭

大学の農場で栽培した野菜の販売や出店、
さまざまなイベントがステージや大学各所で行われました!

お茶席で
おもてなし

仮装
コンテスト
を開催!

白熱! ピンゴ大会

10/25(日) EVENT SCHEDULE

- 10:00 オープニング
- 10:30 Muscle of IPU
- 11:30 仮装コンテスト
- 13:00 ○×ゲーム
- 13:30 バレーボール部ダンス発表
- 14:00 野々市明倫高校 吹奏楽部による演奏
- 15:00 ピンゴ大会
- 16:00 軽音楽部ライブ
- 17:30 表彰式

大学で一番の
マッスルは
誰だ?!

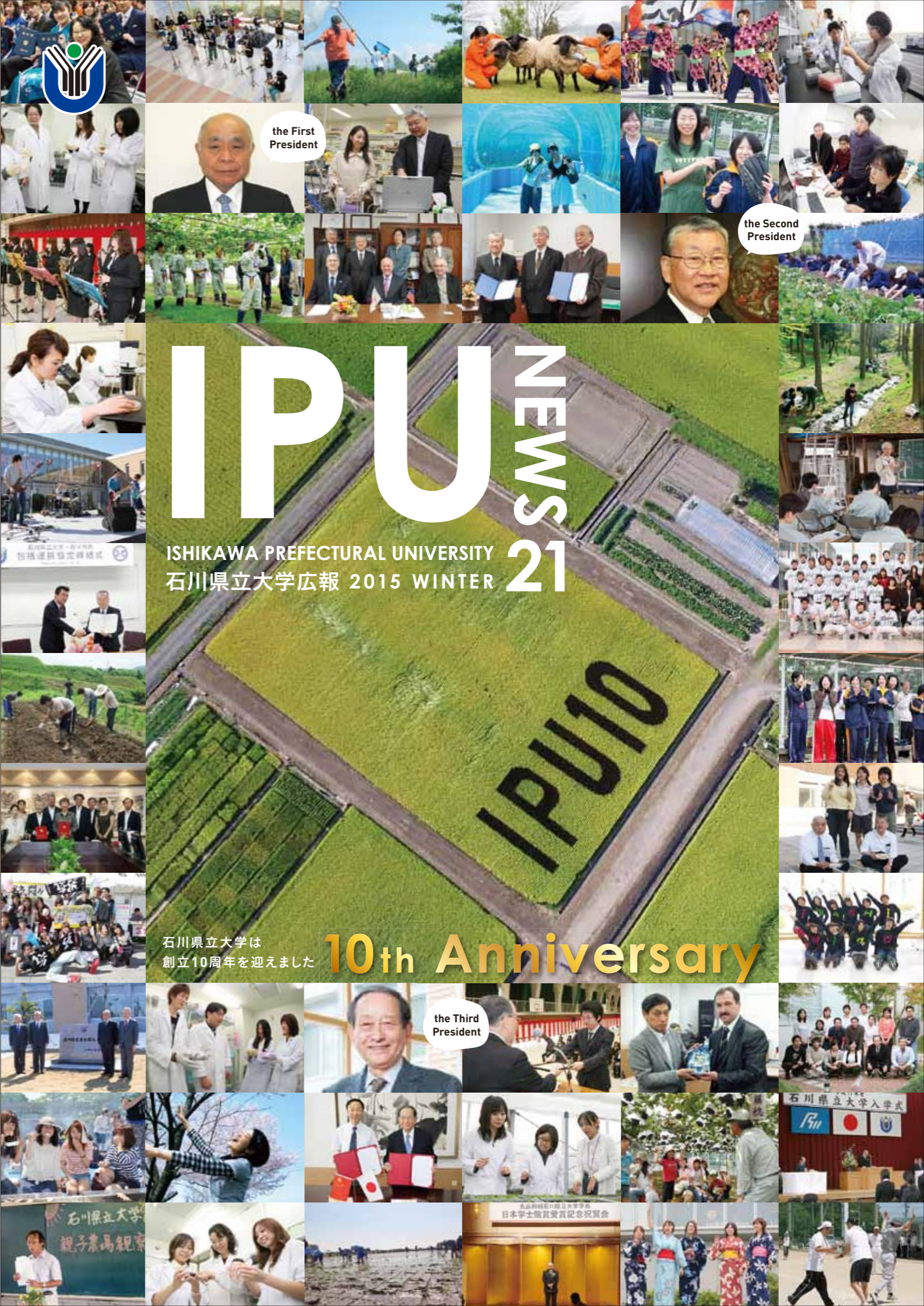
研究内容の展示もあります

10/24(土)
収穫祭

お大きな
野菜が
掘れました!

親子など約150名が参加し大学の農場で栽培した野菜の収穫体験を行いました。地元の野菜である「伝燈寺さといも」などを収穫した子供たちは、親子のふれあいだけでなく農にもふれることができて満足そうな表情でした。

今年も
たくさん
掘れました!



IPU NEWS 21
ISHIKAWA PREFECTURAL UNIVERSITY
石川県立大学広報 2015 WINTER

石川県立大学は
創立10周年を迎えました
10th Anniversary

発行



石川県立大学法人
石川県立大学
Ishikawa Prefectural University

石川県立大学広報委員会

〒921-8836 石川県野々市市末松1丁目308番地
Tel 076-227-7220 Fax 076-227-7410
http://www.ishikawa-pu.ac.jp/
IPU NEWSに対するご意見は下記アドレスまで
E-mail jimuj@ishikawa-pu.ac.jp

最新情報は
ホームページから





プラチナ社会における 農業イノベーション

基調
講演

石川県立大学は2005年、

バイオサイエンスとバイオテクノロジーを基礎学問として

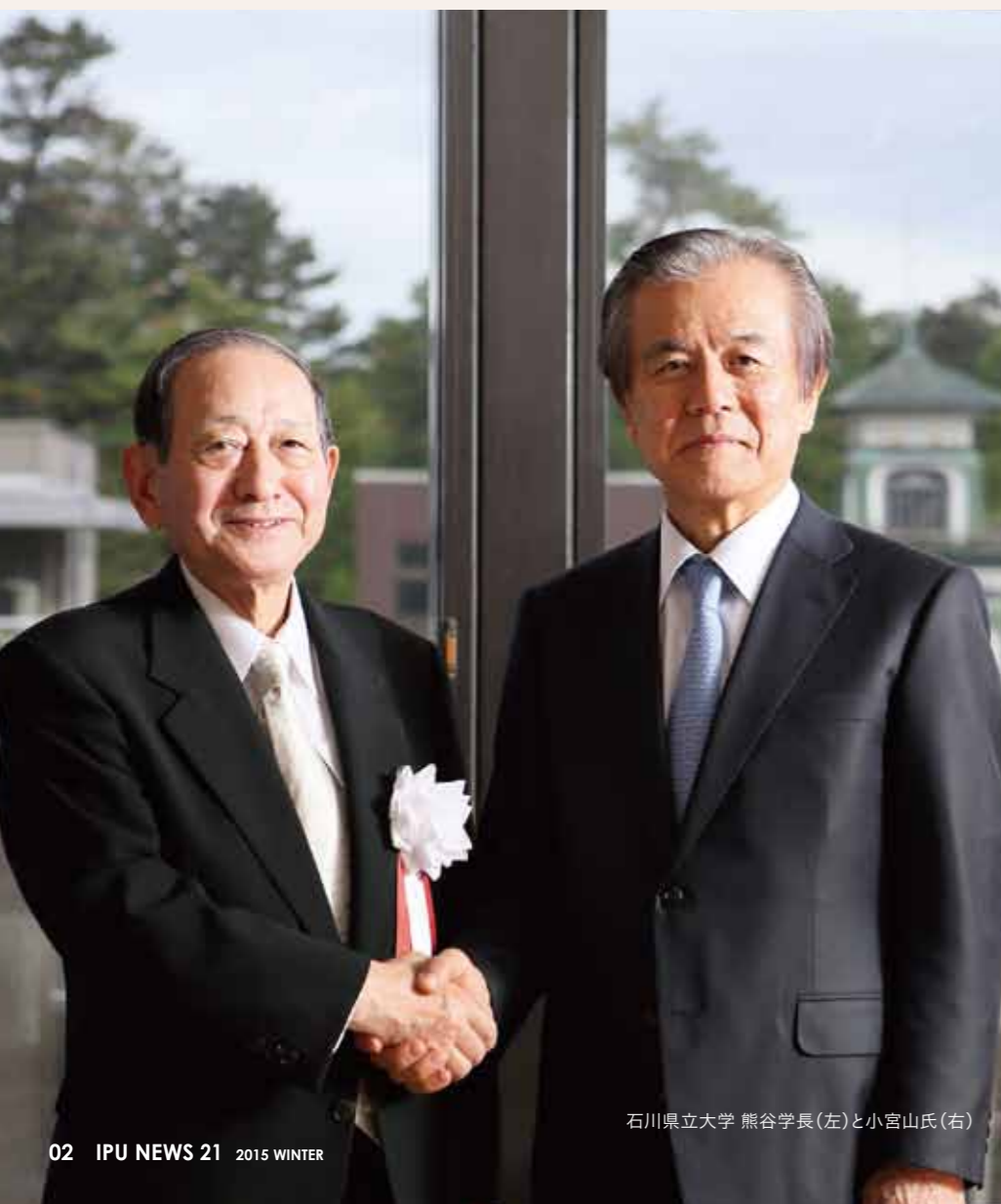
広く教育研究を行い、地域に貢献することを目的に開学し、

今年で創立10周年を迎えました。

この記念に公開シンポジウムとして、

「農業系大学と社会との関わり」をテーマに各分野の専門家の方々をお招きし、

幅広い観点からご講演をいただきました。



産業革命の世界的普及で 社会の均一化が進んでいる

今、人類は本質的な意味で歴史的転換期を迎えています。今日は、これからの社会が目指すべきビジョンとして私が提案している「プラチナ社会」とプラチナ社会における農業についてお話しします。

まず、私たちが今生きている21世紀はどのような時代でしょうか。日本や米国などの先進国では、一人あたりのGDPが世界平均の3~4倍です。これを千年前に遡って見てみると、世界の国々はいずれも同じです。千年前は、食糧がある分だけ人間が生きることができた時代でした。これを本質的に変えたのが産業革命です。産業革命は生産性の向上をもたらしました。

農業においては、それまで多勢で行っていた仕事を200人のうちの1人が大規模で先進的な農業を行えば、穀物に関してはまかなえるようになり、生産性はおよそ200倍にまで上がっています。その結果、ヨーロッパや北米、オーストラリア、ニュージーランドの国々が先進国と呼ばれる国となりました。アジアやアフリカは植民地となったところがほとんどです。

最近の10年を見てみると、先進国の急激な落ち込みが目立ちます。中国やインドのGDPが急激に上がり、相対的に先進国が下がってきたわけです。途上国が豊かになってきたのは、工業を始めたからです。このように今、世界中で産業革命が普及し、飽和状態となり、物質的に豊かで均一化された社会に向かっているのです。

日本は江戸時代に黒船が来航し、植民地になる可能性があったにもかかわらず、産業革命に追いつくことができた特殊な国です。鎖国をしていた日本では、和食や芸術などの文化が育ち、教育やものづくりも行われていました。ですから、一気に産業革命に追いつくことができたのです。これは、日本が誇るべき歴史です。

豊かさとともに手に入れた長寿と 新たに生じた多くの課題

産業革命の普及は、人工物の飽和、人類の長寿命をもたらしました。自動車産業を見てみると、現在日本では5800万台ほどの車が走っています。これは14年前もほぼ同じ台数で、2人に1台車を持っている割合になります。2人に1台の割合になると、その先増えることはありません。自動車は廃車になった

三菱総合研究所理事長
東京大学第28代総長

小宮山 宏氏

1944年生まれ。1972年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。東京大学工学部化学工学科助手。同講師、助教授、教授、工学系研究科長・工学部長、理事・副学長を経て、2005年東京大学総長、2009年総長顧問。現在、三菱総合研究所理事長、プラチナ構想ネットワーク会長などを務める。

石川県立大学 熊谷学長(左)と小宮山氏(右)

Special

分だけ新しいものが売れ、年間およそ490万台が日本の自動車の内需とされています。

そうすると、未開のマーケットである中国やインドに売ろうというのは正しい戦略になるでしょう。しかし忘れてならないのは、地球が有限であることです。中国は2007年、100人に2台しか車を所有していませんでしたが、もう100人に10台の割合になっています。あと7~8年で中国の自動車市場は飽和します。

また、豊かさとともに人類が手に入れたのが「長寿」です。20世紀のはじめごろ、まだ31歳だった世界の平均寿命は、2011年には70歳に達し、先進国の平均は78歳になっています。世界の平均寿命が延びたのは、一部の特権階級の人だけでなく、きちんと食べられる人が増えたからです。そして今は飢えより肥満の方が深刻な問題となっています。

このように人類は、有限な地球で産業革命を普及させ、量的な豊かさや人間の寿命が飽和するという大きな転換期を迎えています。そのなかで、自然環境の大きな変化やエネルギー・資源利用の持続性への不安、格差の拡大、高齢化に伴う様々な問題などが世界共通の課題として生じてきています。

「課題先進国」の日本が世界に先駆け 新しい成長モデルを発信する

日本は大変な公害を経験しましたが、半世紀以内に見事に克服しました。日本は多くの課題にいち早く遭遇し、その解決を迫られてきた「課題先進国」です。私たちはエネルギー危機も克服し、1970年に世界一の長寿命を実現しています。日本は、世界に先駆けて新しい成長モデルを発信する「課題解決先進国」として発展することを国家の基本戦略とすべきなのです。

誰もが環境の美しいところに住みたい、長生きしたい、物質的に豊かでありたい、と願っています。その次に求めるのは、生活や人生の質、つまり「クオリティ・オブ・ライフ(QOL)」の追求とそれを可能にする社会システムの実現です。私は、QOLを追求する社会を「プラチナ社会」と定義し、課題先進国の日本にこそ、農業革命、産業革命に続くプラチナ革命を先導するチャンスが訪れていると考えます。

歴史的転換期を迎えた人類が 目指すべき「プラチナ社会」とは

QOLを追求するプラチナ社会では、新しいビジネスが生まれます。その一つがエコロジーであったり、

高齢者の参加型社会であったりするわけです。求めるクオリティは地域によって異なります。自分たちがこの先何が欲しいのか、自分たちで考えて取り組む必要があります。私が提唱している「プラチナ社会構想」には、現在130名ほどの自治体会員と法人会員が参画されています。

1970年代のエネルギーショックでは、7~8年の間で石油の値段が、10倍~30倍になりました。明治時代から輸入に頼って日本の産業化を支えてきた石油の値段がわずか数年の間にこれだけ跳ね上がったのです。石油エネルギーを使う日本のものづくり産業は必死の省エネを行い、世界に先駆けてエネルギー効率を向上させました。いわば、ピンチをチャンスに変えたわけです。

産業の省エネ化はずいぶん進みましたが、まだまだ家庭やオフィス、病院などの施設、輸送などでは、省エネすべき余地が残されています。住宅は、窓ガラスを二重や三重にし、障子戸との間に動かない空気をつくるなどの工夫をするほか、太陽光発電を行えば使うエネルギーより作り出すエネルギーの方が多くなるでしょう。では、日本を走る5800万台の車の燃費はどうでしょうか。12年前の車と今の新しい車では燃費は倍ほど違うでしょう。車が使用するガソリンの量は減るはずなのです。

日本のエネルギー消費の2/3を占めている家庭、オフィス、輸送において、一定の数でエネルギー効率が増えるなら、これからの日本のエネルギー消費は増えるわけがありません。1973年にはものづくり産業でGDP200兆円でしたが、12年後には330兆円になっています。しかし、エネルギー消費はまったく増えていません。これが工業省エネの時代なのです。

しかし、電気の使用量は増えています。日本の産業構造において、サービス業の割合が高くなってきたからです。オフィスで使うのは電気ですが、GDPが上昇するほどにはエネルギーを必要としません。車は買い換えのたびにエネルギー効率が良くなるでしょうし、再生可能エネルギーなどを活用しながら日本はエネルギーの自給国家になることもできるのです。これは理想論ではなく、極めて現実的なビジョンなのです。

プラチナ構想を実現する 若い人材の育成が不可欠

2050年、私たちが目指すのはエネルギー自給国家です。多くの人がこれは理想論だと言いますが、私

は2040年頃までにこれに近い状況は実現できるのではないかと考えています。日本には都市鉱山があります。自動車を500万台廃車にするなら、古い物の使える物は使い、新しい500万台を作れば良いのです。ビルも同様に、取り壊したビルの使えるものは活用し、新しいビルを作れば良いのです。都市鉱山には十分な資源があり、エネルギー的にも有効です。

ひょっとすると21世紀最大の資源は水になるかもしれません。日本にも資源は十分にあるのですが、それを理解して前に進む人材が不足しています。たとえば、林業の国内自給率はたったの25%です。人が林業から離れてしまったことで、近年の土砂崩れなどが発生しています。人が木を植える循環を作らずに放置すれば密林となり、土壌が弱くなり、土砂崩れを招くのです。これから必要なのは近代的林業です。きちんと取り組めば5兆円の産業になり、国土の強靱化にも役立つでしょう。

これから求められるのは、自然共生社会です。富山はコンパクトシティとして知られていますが、皆がまとまって住むと残った土地はどうすれば良いのでしょうか。収益性の高い農林業を行えば良いのです。農業は、米で1兆8千億円、野菜で2兆数千億のビジネスです。一人で行っていた作業をワークシェアリングで高齢者にも参加していただき、参加型社会のモデルを作るのも一つのあり方でしょう。プラチナ構想ネットワークを立ち上げ、各地でさまざまなことに取り組もうと活発な動きが始まっています。私は、希望は十分にあると考えています。

農業は、作物を作るだけでなく、売って利益を上げなければなりません。今、安心安全な食が期待されています。クオリティの高いものは高くても売れる時代です。そうすると、ICTを導入した高度な経営管理も不可欠でしょう。きちんと会計を行い、サプライチェーンを考えるより高度な企業経営的スキルと技術の動員が必要なのです。若い人が後を継ぎたいような農業モデルを作り、国際競争ができる人材を育てていく必要があります。今、我々人類を迎えている歴史的転換期に、この先向かうべき方向を考えるのがプラチナ構想なのです。

10周年にあたり、ぜひこの実現に向かう人材の育成に進んでいただきたいと思えます。課題先進国の日本で、その解決に取り組むことは世界にとって大変有意義なことなのであります。

石川県立大学創立10周年記念公開シンポジウム「農学系大学と社会との関わり」招待講演



「植物科学で食糧問題に挑む」
芦苜 基行 (名古屋大学生物機能開発利用センター教授)
コメの粒の数を増やす有用遺伝子を用いた優良品種育成の具体的な手法を説明。世界にそのイネを無償で配布するWISHプロジェクトの取組みを紹介。



「農水産物を活用した産学官連携-弘前大学における事例-」
加藤 陽治 (弘前大学特任教授)
サケ水産由来プロテオグリカンの応用研究と製品開発、赤いリンゴ(紅の夢)の活用研究等から地域活性化を目指す取組みについて紹介。



「可能性の無視は最大の悪策」
高野 誠鮮 (羽咋市文化財室長、農務省大臣参事官兼地域創造アドバイザー)
羽咋市神子原地区の過疎高齢化集落の活性化プロジェクト。限界集落からの脱却、神子原ブランド誕生から成功までのプロセスを紹介。

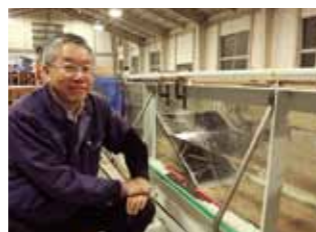


「微生物由来生理活性物質の作用機構研究とその応用」
吉田 稔 (理化学研究所・吉田化学通信学研究室主任研究員)
膨大な種類の微生物から新しい医薬・農薬の開発につながるため、特異的で強力な生物活性を示す天然物の作用機構研究への取組みを紹介。

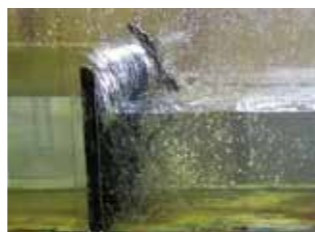
私たちの身近に流れている河川には、農業用水や生活用水を取水するための堰が設置されています。特に農業用水を取水する堰のことを頭首工と呼びますが、これらの頭首工や堰が設置されている場所には、魚類等が採餌場所や産卵場所へ移動できるように「魚道」と呼ばれる施設が設置されています。最近では農業用の水路や水田にも、この魚道が設置されるようになってきました。かつて魚道は、漁業者への補償を目的としていましたが、近年それは生態系の保全を目的として設置されるケースも増えています。近年の農作業の効率化・低コスト化をめざした圃場整備事業や水路改修事業によって、水田や水路を自由に行き来できなくなった魚類等のために魚道が設置される事例は、そのひとつです。

地域水工学研究室では、水田周辺の魚類のための「魚道」の研究を2005年から行っています。石川県中能登農林総合事務所が羽咋郡志賀町末吉の鷺池と下流水路の間に設置したトミヨ(トゲウオ科の淡水魚、石川県絶滅危惧種I類、石川県指定希少野生動物種)を対象とした魚道に関して、室内実験と野外モニタリング調査を実施したことが、魚道研究のきっかけです。研究の結果、トミヨが遡上可能な魚道の条件を明らかにし、その機能を野外で検証することができました。その後、当時専攻していた一人の大学院生の発案で、通常は水路底面に垂直に設置する魚道隔壁を上流方向に傾斜させた魚道隔

壁の模型を製作し、メダカとドジョウを用いた遡上実験を実施しました。その結果、隔壁1枚同士の比較では、上流傾斜隔壁が鉛直隔壁より優れた遡上性能を持つことが明らかになりました。現在は、その1枚の傾斜隔壁を用いた基礎実験を実施している段階で、基礎実験で高い性能を発揮した隔壁を用いて魚道模型を製作し、魚道全体の遡上機能の検証を行う予定です。



石川県立大学水理実験棟にて(一恩英二准教授)



鉛直隔壁(水位差11cm)を遡上するカワヤツメ

Close Up 1

水路や河川の魚類のためのバリアフリー技術の開発

環境科学科
地域水工学研究室
一恩 英二 准教授

Close Up 2

大人数クラスでのアクティブラーニングへの取り組み

生物資源環境学部
食品科学科
小椋 賢治 教授

最近の教育現場では、教員による一方通行の講義形式の授業とは異なり、学修者の能動的な参加を取り入れたアクティブラーニングが盛んになりつつあります。アクティブラーニングを導入すると、論理的思考力、問題解決能力、コミュニケーション能力を養うことができます。アクティブラーニングの方法としては、グループワーク、プレゼンテーション、体験学習などが挙げられます。いずれも少人数クラスでは実行可能ですが、100名を超えるような大人数クラスでは一方通行の講義形式をとらざるを得ないと、一般的には思われています。私は、一年次向け教養教育科目「有機化学概論」(履修登録者141名)でアクティブラーニングに取り組んでいます。

私が導入したのは、ハーバード大のマズール教授が考案した「ピアインストラクション」です。この方法は、あるトピックについて短い講義をおこない、その後、コンセプトという多肢選択問題を出题します。学生はクリッカー(小型投票端末)を使って回答を送信し、その結果はリ

アルタイムで集計されてスクリーンに投影されます。この時点では教員は正答を教えません。学生は集計結果を見ながら、なぜその選択肢を選んだのか、隣席の学生と議論します。そして、同じ問題で二回目の投票をおこない、正答率が上昇すれば、議論の効果があつたことになりま

す。最後に、教員が解説します。ピアインストラクションの授業を実施して、学生にアンケートをとりました。「参加型の授業で楽しい」「みんなの回答がリアルタイムでわかっておもしろい」「眠くならない」といった意見が多く、概ね好評なのですが、「予習してないとついていけない」という声もありました。今後は、大人数クラスでのアクティブラーニングをさらに磨いていきたいと思

今年度は全学研究プロジェクト「アクティブラーニングの実践への取り組み」が採択されており、担当者全員で智慧を出し合いながら授業改善に向けて活動しています。



アクティブラーニングを取り入れた授業をしている小椋教授(左)と受講中の学生(右)



全国大学附属農場協議会

全国の大学農場・センター等の運営と学生教育などについてのさまざまな問題を協議し発展をはかるための団体として、全国大学附属農場協議会があります。現在、全国53大学の附属農場やセンターが加盟しています。平成27年(2015)8月27~28日に、石川県立大学附属農場が主催し、秋季全国協議会と教育研究シンポジウムが開催されました。1日目は金沢市香林坊の東急ホテルにて会議と教育研究シンポジウムを行い、2日目は石川県砂丘地農業研究センター(石川県かほく市)と兼六園を視察しました。約150名の参加者があり、大学附属農場の現状と今後についての活発な議論がなされ、大学間の交流が深まりました。

IPU Report



ルビーロマンの視察



会議の様子

S×T TALK!

Students Teachers

Theme 教職課程の本音を語ろう

教職課程で学べば、高等学校教諭一種免許(理科・農業)と中学校教諭一種免許(理科)が取得できる石川県立大学。教養教育センターの矢野先生と石倉先生、教職科目を学ぶ各学年のみなさんに、教職課程の学びについてお話を伺いました。

Students

教職課程各学年のみなさん

Teachers

教養教育センター 矢野 喜夫 教授

教養教育センター 石倉 瑞恵 准教授

石倉 / 今日はみんなが教職課程を選んだ動機や教職の勉強について自由に話しましょう。ではまず自己紹介から。

辻 / 環境科学科1年の辻です。石川県能美市出身です。生物や農業系が好きで、県立大に入りました。中学生や高校生に生物の面白さをもっと知ってもらいたいと思って、教員を目指しています。

石倉 / 辻君は、中学の理科と高校の生物の先生の両方を目指してる?

辻 / 今は高校の先生を志望していますが、中学の先生もいいなあと。

石倉 / じゃあ、県立大に入る時から中学の理科教員の免許が取れることは知っていた?

辻 / そうですね。知っていました。

小津 / 生産科学科2年の小津です。三重県出身です。先生になろうと決めたのは高校生のとき。受験勉強で自分が生物の勉強が好きなのに気づき、ずっと生物に関わる仕事がしたいと思い、そのためには先生になるのが一番近いのかなと考えて教員を目指しています。

長井 / 環境科学科3年の長井です。新潟県出身です。

石倉 / 長井君はこの先教育実習があるね。教職の勉強は一通りやってきたわけだけど、これまで気持ちが揺らいだりしなかった?

長井 / 教職の授業は1限や5、6限にあって、みんなが「遊びにいくぞ!」と言っているときに自分だけ行けないっていうのはありましたが(笑)。でも、矢野先生や石倉先生の授業を聞いていると、ためになることがたくさんあります。自分は外国のことに興味があるので、外国の教育制度を学んだりするのも好きでした。授業は2年の時がきっかけですね。

石倉 / 教職をとっている人は2年の後期まで踏ん張れるかどうかですね。

矢野 / たしかに。そこまでがんばれば後は続けられるでしょう。

石倉 / 今、1年生で教職をとっている学生は24人。中学の免許も取るとなると...

矢野 / 取得単位数も多くなるから大変。身を入れて勉強しないとね。

石倉 / 澤野さんは今年、石川県の高校教員採用試験に合格しました。

澤野 / 生産科学科4年の澤野です。石川県出身で植物病理学研究室に所属しています。私は皆さんと違って最初から教師を目指していたわけではなく、「とりあえずとってみよう」という感じで教職をとったんですが、どんどん周りがやめていくので心が揺らいで(笑)。でも、なんとか教育実習まで続けることができました。教育実習に行って、合わなければやめようと思っていたんですが、実習で生徒達との関わりがすごく楽しくて、この生徒達に教えたい!という気持ちが強くなったんです。それで教員になろうと決めて、教員採用試験を受けました。「教育実習は辛かった」と言っている人もいますが、私は教育実習のためにここまで頑張ってきたっていうくらい、すべてが楽しかったです。ぜひ、がんばって教育実習まで続けてほしいですね。

矢野 / 教育実習までがんばる、というか教育実習をどうとらえるか、だね。

石倉 / 澤野さんは農業の科目で教育実習に行き、農業で石川県教員採用試験に合格しました。ちょっと自慢になりますが、今年度の石川県農業教員の採用枠は2名で、その2名ともが県立大の学生なんですよ。



矢野 / 2人にはぜひがんばってほしいね。

石倉 / 澤野さんに聞いてみたいことはない?

辻 / 農業の教員免許ってやっぱり取ったほうがいいんですか。

澤野 / 私も最初は理科だけだったんですが、3年のときに農業も取ってみようかなと思って、2年生と一っしょに授業を受けました。農業から入って理科の先生になる人もいますので、2つ免許を持っていたほうが強みになると思いますね。

小津 / どのくらい前から教員採用試験の勉強を始めたか、教育実習ですることを考えたりしたのか聞いてみたいです。

澤野 / 教育実習の前は寝るのも緊張するほどでしたが、行ってみたら楽しくて...。授業の準備はもちろん必要ですが、生徒が興味を持つ話の種を日頃から見つけておくのも大事な。採用試験の勉強は、3年の1月ごろから少しずつ始め、追い込みをかけたのは2週間くらい前から。就職も考えてSPI(一般常識)の勉強もしていました。

矢野 / たしかに教職だけに絞るとリスクはあるからね。

石倉 / 1年、2年の2人は、入学時から先生になりたいという希望が強いですが、3年4年の2人は、そうでもないんですね。長井君は多才だから自分の進路がまだ決まっていなくて?

長井 / いや、多才なわけでは... (笑)。僕は公務員も考えています。先生になるとしたら地元の新潟で先生になりたいです。

石倉 / 3年で進路が定まらない人はいますし、4年でもまだ迷う人もいます。矢野先生がいつもおっしゃっているように、教職課程は教員志望の学生だけでなく、関心のある学生ならばいつでも歓迎していますよ。

矢野 / もちろん教員を目指す人が多いのはいいけれど、必ずしも教員採用試験を受けなければならないと考える必要はない。教職課程で勉強することは副専攻のような意味合いもあるし、一種の連帯感も生まれて大学生活を充実させる意味もある。教職の勉強はそれ以外の進路でも役に立つね。これからは高校の教員になるなら学識的に修士課程を修了していた方がいいと思いますね。大学院に進んで教員になる人はあまりいないけど、本当はそれが理想じゃないか。

石倉 / 今は生涯学習社会ですので、これで終わりという教え方はしたくないですね。中学校の免許が足りなければ、また大学に戻って授業を受けてみても良いし。民間企業に就職してからでもいいです。

矢野 / 資格を取れるものなら取っておこう、くらいの考えならやめなさいという先生もおられるかもしれないが、だからといって本当に教員を志望する人しか教職をとってはいけないということはないからね。

石倉 / 先生がおっしゃる「副専攻」という考え方は重要ですよ。

矢野 / ゼミや研究会のような位置づけだね。



左後ろから小津亜沙美さん、澤野穂乃さん、長井貴広さん、辻宗元さん、左前 矢野喜夫教授、石倉瑞恵准教授

CAMPUS LIFE

農学を通して、とっておきの青春時代を楽しもう。

石川県立大学には、豊かな学生生活を叶えるいろんなイベントがいっぱい!

石川県立大学 10周年記念式典・祝賀会

11月8日(日)、金沢市内のホテルにおいて、創立10周年記念式典を開催しました。式典では、熊谷学長、谷本石川県知事の挨拶のあと、中村石川県議会議長(代理:井出議員)、粟野々市市長から祝辞をいただきました。続いて、本学の創立及び発展にご貢献をいただきました丸山初代学長、松野前学長に、谷本知事より感謝状及び記念品の贈呈を行いました。



熊谷学長による挨拶



式典・記念シンポジウム後に行われた祝賀会は、中西石川県副知事の挨拶に続き、熊谷学長らが来賓のみなさんとともに法被姿となり、本学学生が野々市市の花木である椿から発見した酵母を使って中村酒造さんが製造したお酒「ICHI椿」の樽で鏡開きが行われました。その後、寺西石川県公立大学法人理事長による乾杯のご発声のもと懇談が始まり、本学の前途を祝しました。



丸山初代学長へ感謝状及び記念品贈呈



ミニ実験(食品科学科)



学生による入試・キャンパスライフ体験発表



研究室紹介



田植え 続報

1年生有志によるイネ刈り。

新入生田植え(5月8日)の後で、本学創立10周年を記念してムラサキイネでIPU10の文字を書きました。

動画もHPで見られるよ!

石川県立大学 田植え 検索

台湾ジョイントセミナー

2015年8月11日(火)に台湾台中市近郊にある明道大学において、「環境科学と生態的修復に関するジョイントセミナー2015」(Joint Seminar on Environmental Ecology and Restoration between Taiwan and Japan)が開催されました。このセミナーの開催は、国立屏東科技大学と石川県立大学の連携協定に基づくものです。本学からは、環境科学科から4名、教養教育センターから1名の合計5名の教員と環境科学専攻(博士前期課程)大学院生3名および自然人間共生科学専攻(博士後期課程)大学院生2名の合計10名が参加し、台湾からは、国立屏東科技大学、明道大学、国立台湾大学、国立宜蘭大学より教員11名、学部生・大学院生8名の合計19名が参加しました。

本大学院生の発表は、「能登半島における絶滅危惧種カワヤツメの人工繁殖と養殖」、「手取川流水へのマンガンイオンの吸着」、「発生ガス質量分析法による土壌腐植酸のキャラクタゼーション」、「水稻は土壌二次鉱物からのセシウムを吸収するか?」、「金沢における冬季雷発生条件の解析」と多岐にわたるものでした。



日本と台湾のセミナー参加者



明道大学学長より歓迎の挨拶

2015年度日墨(日本・メキシコ)

開講式

戦略的グローバル・パートナーシップ研修がスタートしました

2015年度の日墨戦略的グローバル・パートナーシップ研修・食品科学コースのスタートにあたり、5月8日(金)に開講式を行いました。今年度は2名のメキシコ人研修生が7ヶ月間食品科学科の研究室に配属され、研究を通しての技術研修が行われました。本学では、2010年度よりJICA(独立行政法人国際協力機構)の協力のもと本研修コースを開設し、グローバルな視点を持った学生の育成を図るとともに、日本・メキシコ相互の親睦活動や技術協力を行っています。



実験を行うメキシコ人研修生



Community Contact

本大学は、地域社会の発展に貢献しています。

能登半島の里川に棲むカワヤツメの人工ふ化に成功! 地元小学生を対象に放流会開催



写真1/カワヤツメの成魚。体長約50cm(荒川裕亮撮影)

環境科学科柳井研究室では、能登半島の里川から捕獲したカワヤツメの人工ふ化に成功しました。カワヤツメは顎を持たない無顎類と呼ばれ、脊椎動物の最も原始的な形態を持つグループの生き残りですが、全国的に大きくその数を減らし、環境省の絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。当研究室では平成27年4月に地元川漁師の方から能登町を流れる町野川に遡上してきたカワヤツメの提供を受け、蓄養して成熟させた後採卵し、人工孵化し約1万尾の稚魚を得ることに成功しました。その稚魚の一部を使って7月23日、能登町との共催で地元柳田小学校6年生約20名を対象に、カワヤツメの生態や人工ふ化について説明した後、顕微鏡を使った稚魚観察(写真2)、地域に伝わる伝統的漁法の実演として放流を行いました。この試みは地元の子供たちにカワヤツメの生態と保全の意義、そして地域のヤツメ文化を理解してもらい、貴重な地域資源を次世代につなげる一歩となると考えられます。



写真2/小学生にふ化稚魚の観察を指導する大学院生

全国植樹祭に合わせ「のとキシマツツジ」の開花調整

本学の地域貢献活動の一環として県からの要請を受け、福岡信之教授は5月上旬に両陛下と開花調整を行った「のとキシマツツジ」の満開を迎える「のとキシマツツジ」の開花時期を、全国植樹祭に合わせて約2週間遅らせることに取り組みました。4月中旬にNPO法人「のとキシマツツジの郷」から本学に届けられた古木の盆栽を約10℃に保った大型冷蔵庫内に入れて一定期間生長を抑制しました。その後は、つぼみのふくらみ状態を確認しながら自然光のあたるビニールハウスに移して育て、8割開花時に再び約8℃に保った大型冷蔵庫内に置いて開花の進行を抑えました。その結果、植樹祭当日に満開状態となり、両陛下を迎えることができました。



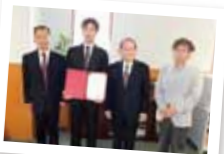
卒業生の声

博士後期課程自然人間共生科学専攻修了 1期生 勝見尚也

石川県立大学一期生の勝見尚也です。私は石川県立大学の博士前期課程修了後、化学メーカーの研究所に2年間勤務し、平成25年4月より石川県立大学の博士後期課程に入学しました。そして入学してから2年半後の平成27年9月、通常よりも半期短縮して博士号を取得する事が出来ました。こうして半期短縮することができたのも、指導教員をはじめとする先生方の温かいご指導、そして共に研究をしてきた研究室の皆様のおかけだと感じています。10月1日からは早稲田大学創造理工学部環境資源工学科に助教として赴任し、新しい研究室で新たな研究を学生たちと一緒に取り組んでいます。石川県立大学は非常に恵まれた環境が整っています。皆さんが充実した大学生活をおくり、研究を通して大きく成長することを期待します。是非、かけがえの無い財産を手に入れてください。



就職先の早稲田大学にて



博士号の授与式

Campus Schedule	12月 December	1月 January	2月 February	3月 March	4月 April	5月 May
キャンパス スケジュール	・冬季休業 (~1月中旬)	・私費外国人 留学生試験	・後期試験 ・一般入試前期日程 ・春季休業(~4月上旬)	・一般入試後期日程 ・卒業式・学位授与式	・入学式 ・入学オリエンテーション ・前期授業開始	・開学記念日